小笠原島紀事

巻之卅一
卅三
止

農商務省
圖書
第 和 三 號
共 三 冊

太政官文庫

和書門	類	號	函	架	冊
	九一	八一七〇	二二二	二	三三

内閣文庫

和書	號	冊	架	函
	八一七四	三三	一四	一七三

内閣文庫

番號	和 8174	
冊數	33 (33)	
函號	173	180

国立公文書館 National Archives of Japan

小笠原島紀事巻之三十一

目録

一彼理日本紀行無人島ノ部

日本政府図書
大政官文庫

彼理日本紀行巻之十 無人島部

瀬脇壽人

内田又五郎

無人島ハ。日本海中ニ在て。其地形殆と北南ニ向て流れ。北緯二十六度三十分と。二十七度四十五分の間ニ位し。此島の中心を通する線ハ。東経百四十二度十五分ニ在り。本島ハ一千八百二十七年。英國の加比丹「ビーチエー」氏。其測量家をして測らしめ。漫りニ其説を以て。正説とし。既ニ名義ある事を知らす。彼等ヵ始めて。撿出せし如く唱へて。本島ニ名を命し。其北ニ在る者を。「バリー」群島と称し。中央ニ在る三島の一を「ペール」島。其二を「ブックランド」島。其三を「スタップレトン」と称し。又其南ニ在る者を「バイレー」島と称す

此南の「ハイレー」島ハ。鯨猟船の船頭「コッフィン」氏。一千八百二十三年始めて本島ニ到着して其地位を亜國ニ報告し。其名を譲て「コッフィン」港と名けたり。然るニ其後本島ニ何の名称も無りけれハ。今予天文家の碩学。「フランシス、バイレー」氏の姓を取て。「バイレー」港と名けしなり。又「ペール」島の大港ニハ加比丹「ビーチー」氏。既ニ名を命して「ロイド」港といへり。本島ハ一千六百年間より普く世人の知る所なるニ。一千八百二十七年ニ至り。加比丹ビーチー」船頭「コッフイン」両氏。偶ニ島中ニ到着して。自ら始て検出せし地と。諸所ニ地名を命せしハ。実ニ面目を失ふニ似たり。「ケムヘル」氏の説ニ。遥ニ前代。一千六百七十五年。日本人既ニ本島ある事を知り。之ニ名けて「ブナ、シマ」といへり。「ブナ、シマ」ハ人なき島の義なり。又同氏の説ニ拠れハ。一千六百七十五年日本船一隻大風の日ニ当り八丈島より纜を解き、出帆せしニ風の為ニ流されて偶々大なる一島を発明せり此島ハ八丈島より東方ニ当り日本里数ニて三百里と隔つといへり偖加比丹「ビーチー」船頭「コッフィン」等島中ニ上り見しに更ニ人跡なけれ共気候甚た温和ニして地質肥腴又清水を生し多く草木繁茂し殊ニ亜カ樹（亜カといふ酒を造る樹なるへし）多し是を以て考れハ本と暖國ニ生する樹なれハ本島の地位日本より正東ニ当らすして多く其南ニ当ること察せらる日本人も亦本島を無人の島嶼とす然れ共其海濱ニ海魚蟹類の多き事実ニ量るへからすして其大なるハ四「ヒート」乃至六「ヒート」の者ありといへり彼理氏今「ケムフ

ル」氏の書記する所と左に挙る日本人の書記する所とを
合せ見るに其土地形勢実に符節を合せたるか如し
左の抄譯に載る所の亜カ樹ハ「ペール」島に在り
「カラップロッ」人名氏反譯「リン、コク、ツウ、ラン、ト、シッ」抄説「カラップロッ」といへる洋人の反譯したる日本の三国通覧図説より。校書したる説の意なり
本島の本名ハ。ヲ、ガサ、ワラ、シマ小笠原島なれ共。通例世人之
を。「モン、ニン、シマ」と称せり。漢名「ウ、ジン、トン」と云ふ。共に人
なき島の義なり。今予此名を取て以て此書に載す。「ヲガ
サ、ワラ、シマ」といふ名称ハ本島に始めて渡来し。島中の
図を作りし人の名より取る。即ち二百年前。南亜米利加
の一部を「マゲルラン」といふ人検出して。「マガラニア」と
名けし同例なり。

無人島ハ伊豆国の南東海中。日本里数二百七十里に在
り。伊豆の下田より。「ミヤケシマ」三宅島まで十三里。「ミヤケ
シマ」より「シンシマ」新島まで七里。「シンシマ」より「ミコウラ」
まで五里。「ミコウラ」より。八丈まで百八十里。其最南部に
至れハ。二百里に及ふといへり。
無人島と称する群島ハ。北緯二十七度に在り。島中の氣
候甚々温和にして高山の際に。数十の渓谷を生し。小流
淙々として漲り。自然に肥腴の地質なり。是故に蚕豆。小
麥。粟。其外諸種の穀類。甘蔗を生し。又「ナンキン」と称する
木。即ち巴豆樹。及ひ蝋を製する木を生す。漁猟極めて多
く。以て産業と為すへし
島中は草木甚々として繁茂すれ共。四足の獣類ハ甚た

少し。木ニハ頗る巨大ニして一人の手ニて抱き得ざる
者あり。又其高さ支那の三十尋。即ち西洋の二百四十「ヒ
ート」ニ至る者少からす。其木質堅牢ニして美麗なり。此
外「シヲート、ロ、ツョーング、リヨ」（名 蓋し漢乎）一名「チャマロプス、エキ
セルサ」と称する高木。椰子「アレカパルム」（山樹名）支那ニて「ヒ
ヨートアニ、ナ」と唱ふる實を生する木。「カチラウ」（樹名）紫檀。「ト
ーモー」（漢名乎）樟脳「チュッブヒグス、ヲス、マウニ、テーニ」ニ（山中生）
する管状の無花菓樹の蒙地上ニ横もり生する。長春藤（キッタ）
の葉ニ似たる一種の葉ある高き木。肉荳蔻。桑樹等の類
あり

草類ハ。撒児沙巴里児刺。即ち山帰来。東桂「アサ、ジヲニ、キ
ワ」（蓋し漢名乎）と称する。薬草等あり

鳥類ハ。「ハロキーツ」（鳥名）の数種。鸚鵡鵰鴣。白鷗ニ類似したる
る一種の鳥ニて。体格の長き海鳥居住す。此鳥類。皆家畜
の如く徒手ニて捕へ得へし

本島ニ生する礦山物の主宰なる物ハ明礬。緑礬。各色の
石類。及ひ化石の種類なり。海中ニ鯨魚多く。又大なる蝲（ガリ）
蛄（ガニ）。大貝及ひ世ニ海中の胆と称する「イシニ」の類あり且
海中より産する物品。極て多く。実ニ枚挙するニ遑られ

日本延寶三年西洋紀元一千六百七十五年。長崎の住人。
「シマエ、サエモン」。（島屋左衛門の誤乎）ヒソ、サエモン（未詳）「シセエ、タイ
ロ、サエモン」（島屋太郎左衛門なるへし）の三人。天文地理両学ニ達し
たる者なきハ。江戸小網町ニ住する船工棟梁。「ハトベ」と
いふ者ニ誘引せられ。支那の精功なる船工ニ造り為る。

一大船に乗り船中の人員三十名にて。伊豆國下田に到り。本地の海軍局より路票（ワウライテガタ）を得て四月五日。下田港を発し。八丈島に碇泊せり。夫より又南東に向て奔り。八十箇の群島を検出す是に於て本島の密圖を写し。加ふるに島中の氣候。位置。及ひ産物を以てし仝年六月二十日下田に飯着し。圖説を上梓して。之を公行せり

右三人の上梓し為る圖説に。「ミコウラ」と。八丈の間に在る黒瀬河と稱する急流ある事を載せるハ。実に怪むへし。此黒瀬河の幅ハ。二十「マツ」即ち日本里数にて半里餘。其長さハ大約一百里東より西に向て峻急に流る。（東より西に向て流るといへるハ。三国通覧を著し人の誤なり西より東に向て流る）此急潮。冬季春季よりも。夏季秋季に於て最も強し。「シマ

に島屋等の。無人島に到るや閏四月初旬にして。其飯るや六月下旬なれハ潮勢頗る緩なるか故に此危き急流を知らさりし乎実に怪むへきの至りなり

無人諸島八十箇の内に於て。其最も大なるハ。周囲十五里なれハ壹岐より少しになり。又之に次て大なるハ。其周囲十里なるを以て。大約天草島の大さなり。此二島の外に八島あり。其周囲二里乃至六七里に及ふ。此十島ハ平地ありて。人民居住すへく。又能く穀類を生す島内氣候煦温にして耕作に宜し是故に他洲の人にても到り住すへし。島中諸所に。各種の貴き産物あり右十島の外。叢爾たる七十箇の小島ハ岩石巉々として峙立し。一物も生し難き地なり

嘗て本島に罪人を送り。一地を開墾して耕作せしめし事あり罪人等群居して村落を為し。帝國日本諸州に生ずる物品と。同様の物を産せり何人にても本島にて一年に一度往来し得へけれハ。交易忽ち盛なるに至り。其裨益ハ莫大なるへし此形勢を以て。餘ハ皆推知すへし日本安永年間即ち西洋一千七百七十一年より。一千七百八十年間。予官命を受て。肥前國に赴き獨乙人。「アーレンド、ウェルレ、ヘート」氏と。相交りし時。同氏予に日本の南東に當り。二百里の海中に於て。著作家某氏「ウースト、エーランド」と稱する島嶼の事を唱へ圖説を示せり「ウースト」ハ荒蕪の義「エーランド」ハ島の義といへり仝氏の説にハ本島未た人民居住せされ共。諸般の草木能く繁生すれハ。将来人民を移し居住せしむへし。右の如く地質肥腴の島なれハ。日本より遠路を厭もれ。植民せハ。必す裨益あるへし。遥に渺茫として隔りたる。獨乙國より植民してハ。其利極めて少なるへしといへり

壽人按するに此一節にて予といへるハ。三國通覧圖説を著せし人自らいへるならん

今此註文の末に無人島一件にて。予か獨乙人より聞き。肺肝に命すへき数十言を載せ以て後人に示すのみ

右本條に述る所の大蟹といへるハ。ケンヘル」氏のいへる。大なる緑色の亀を。誤り認めて。大蟹といひしならん

右の註文に述る如く。日本人一千六百七十五年に當て。本島を検出すといひしか。一説に尚ほ其以前。日本人本島に

渡来すともいへり英人ハ本島検出の事ニ於て更ニ共ふる所なし彼理氏ハ是より先一千六百六十二年四十噸の日本船其海濱より暴風の為ニ流され偶々「ロイド」港ニ漂着して始て本島を検出し本年冬季ハ本港ニ在留して春暖を迎へ日本ニ皈りしと亜人「サウリ」氏より聞り此時船中ニ些少の乾魚の外他物なきを以て島中の土人其貯ふる所の食料を日本人ニ恵み與へしとなん其後八年を経て一千六百十七年ニ當り佛蘭西船或る日無人島中の一島「スタフレトン」を出帆せしニ遥ニ離れて海岸ニ爛々として火光を放ちたるを見出しけれハ小船を送り検査せし処しニ日本船破却して船中の人員大半溺死し僅ニ五人餘命を繋き実ニ惘然の形勢なりけれハ佛船の将大ニ哀憫の心を生し彼五人を船中ニ乗せ「ロイド」港ニ携へ行き遂ニ之を日本ニ送致すといへり。此時我ら「シユスユイハシナより出たる。士官の一船も。偶々「スタプレトン」ニ来着して。右の船の破却せし痕跡を見しといへり。亦以て證とすへし。士官等。島中の一小港ニ上陸し見しニ銅板銅釘なと尚ほ存在せり。此餘物。及ひ其事跡を以て察するニ。右の船ハ日本船なる事必せり。又板具なと。未た腐敗ニ至らす挫折ニも至らされハ。久しく年月を経さる事も證とするニ足れりといへり

上ニ擧る鯨獵船の船頭「コッフイン」氏ハ。其本國を載されハ。何れの國の人なるや。知るへからすと雖。其姓字の連綴を以て考ふるニ恐くハ亜國人ならん若し亜國人なる時

ハ「ナンチユケット」より出船して本島に到り。其一港に彼か姓
字を譲て「コッフイン」港と名けしあるへし然るに「ビーチェー
氏ハ本島に到りたれとも大に謙遜して其名を命せす「バ
イレー島といひしこそ。此バイレー島ハ。土人南島と称し
無人島の一部とれ。「ロイド」港の南大約十二里洋の海中に
在り。加比丹「ビーチェー」氏。英国の測量船「ブロッソム」船を指揮
して本島に到着し。之を英国王の属地として。英国の名称
を唱へし久しハ。実に一千八百二十七年なり然るに土人
等英国の管下なる事を肯せれ。英国の加比丹「ビーチェー」氏
か命したる名称を唱ふる者なし。之を譬ふるに。「ビーチェー」
氏。此部群島中の二島を「ブックランド」「スタップレトン」と名け
しに。土人等。此名称を唱へす。「ゴート」島「ホグ」島と称せし類

なり。英国人の無人島に来着して。其属地とせし年月ハ。銅
板に彫刻し。釘にて樹幹に。固定しありつれ共。久しからす
して消滅せり是故に英国より。無人島近海に。航海せし者
に命し島中に上陸し。近隣の岡上に登り。英国の国旗を飜
し。以テ英国の属島たる事を表せしむ他人より之を見れ
ハ英船の来着せし事を報する者の如し。土人ハ島中の人
民にて。百事十分なれハ。敢て他の管轄を受る事を要せれ
とて。政府を設る事を欲せれ
英国の加比丹「ビーチェー」氏。本島に到至し明年。魯国の海軍
加比丹「ロトケ」氏到着して英国の如く属国とせし式礼
を行ひ。又其私有とせ至
右の如く諸説あれと本島を検出せしハ日本人為る事。実

に明けし。恐くハ日本人。其初殖民して直ちに又鎖国せし
ならん。日本人在住の時。先ツ伊斯巴尼亜船葡萄牙船。独乙
船渡来して。無人島人と通親し其後亜人。英人。魯人来舶せ
しなるへし。伊斯巴尼亜よりハ。教法の長官。来りし事と見
へし。本島を法語にて称誉せし事あり。土人某氏いへるハ
予始め本島に来着せし時ハ。一枚の板ありて。本島に渡来
せしハ魯人を以て濫觴とすと書し者ありしといへり。欧
洲よりハ。未た本島殖民する事を謀りたる者を聞す
一千八百三十年に至り亜人欧洲人等。本国の男女数人を
携て。「サニドウィス」島より出帆し無人島に渡来せり。此行の
先登ハ五名にして。亜人二名「ナサニール、サウリ」。「アルジン、
ビ、チヤピン」両氏。英人一名。リチヤルド、ミルドチヤムプ」氏。丁抹人

一名。チヤーレス、ジヨンリン」氏。ゼノエ」人一名。「マテラマザラ」氏
なり。彼理か本島に来着せし時。尚ほ残留せしハ亜人「ナサ
ニール、サウリ」氏のみ。「ミルドチヤムプ」氏も尚は存命なりき。
「ラドロ子」といへる群島の一島。「ギユア、ム」に転任すといへ
り「ゼノエ」人「マザラ」氏ハ。既に物故しけれハ。「サウリ」氏尚は
壮年にして美人なる其寡婦を娶り。一子を産なり。「サウリ」
氏自ら些少の田圃を耕せしに。頗る利ありといふ。又「サウ
リ」氏。自ら勤めて番薯を作り。甘蔗を蒸餾して。糖水酒を製
し本島に往来する。鯨漁船に鬻き。一時に数十の弗を貯蓄
するに至れり其後三四年を経て。亜船一艘来着し。船中に
「サウリ」氏か親しき旧老友諺論面諌の悪漢等を携へ来れ
り。「サウリ」氏ハ。斯くとも知られ。彼の旧老友と相親み。貯へ

ある数千の弗を出し。老友と共に之を地中に埋めたり。悪漢等此事を知りければ。数月の間詰を卑ふし。身を謙り。益々「サウヲル」氏に諂諛し。遂に其数千の弗を奪ひ。且婦人を掠め。其家具の物品。及ひ旅記を盗みて。悉く之を売却し本島を遁れ去たり。其後悪漢等「ホノルル」にて捕縛せられけれハ。婦人身命を抛ち。一言を発し云へりけるハ。我再ひ無人島に到るの面目なし。唯ゝ弗を地中より掘り出せしや否。之を探索せんと欲するのみ。

無人島の地形ハ頗る高く。岩石巍々として峙立し。噴火山たりし事粲然たり。本島の水際にハ。珊瑚の小片散在し。水辺より漸く。丘陵の斜地に登れハ田畝線地方に生する青草満地に叢生せり。山上及ひ諸所に散在する岩石ハ。前世界の激動に由て。千形万態を顕し。之を眺望すれハ。城郭の如きあり。塔の如きあり。又巨大にして醜体なる猛獣に似あるもあり。島中岩石の間に。孔の如く門の如き通路あり。其形恰も石工の鑿を以て。穿ちたるに異ならす。蓋し此岩石ハ其初未た流動物たりし時。偶々雨催にて。其雨水山上より。急に海面に向て流れ平面を為して。溝渠を生し噴火の変換に由て。斯く異形を顕せし事分明なり。此岩石の異形なるハ。数百年の星霜を経て。雨水に洗濯せらるゝこと依然として更に。磨滅せし所なく。頭と回らし之を望めハ。甚た山上に登らんとして。新に石工に命し。堅石を切り。石壇を設けしこと疑もる。又「ロイド」港内。南岡と唱ふる所に於て溶化石の中を貫通する奇異天然なる洞門ありて南岡

より北図に達す洞門の入口ハ其幅十五「ピート」其高さ三十「ピート」にまして屋根の如き所ハ其高さ。急に四十「ピート」より五十「ピート」に登り。建築家の穹窿形を作る者の如く。且絶頂に要石あ里て。恰も人造に髣髴夛り且此洞門に。海水流通して。小舟往来すへし尚ほ許多の洞門あり。其一ハ長さ五十「ヤルト」にまして。本港より高図に通すへし土人常に獨木舟にて往来せ里。

本島の土質ハ礦物と各種の緑石と我混し。又圓柱形の熔化石を含み加之「ホルンフレンテ」の礦物名白瑪瑙あり本島ハ往時噴火山たる我證多し。往昔「ペール」島に居住せし者のいへるハ。地震地れるの明證にて方今に至り。毎年地上。両三動する事ありと。

ロイド港ハ。「ペール」島の中央にして。其西部に在り。本港ハ海中頗る深けれ共。船舶の出入に容易にして。碇泊するに風波を防き。甚た安全の地なり碇を投すれハ。十八尋より二十二尋に達す。本港ハ「ビーチェー」氏の海図にて。北緯二十七度五分と三十五秒。東経百四十二度十一分と三十秒に在り。然れ共「シュスコイハンナ」船の船将の測りし所にてハ東経百四十二度十六分と。三十秒なるを以て。「ビーチェー」氏の測りしより五里東に在り蓋し「ビーチェー」氏の謬誤なり。本来良港と稱するハ風ある時に當て。港内の船舶。自在に動揺し。風下に向ふ程の。深さと廣さとありて。入港に便なるをいふ。「ビーチェー」氏か本港の方向を定めたる説ハ。実に正説なるを以て彼理氏か説と合せて。之を附録に載す。樹

木ハ来着する船舶屢々切取り積み去ると雖。甚た多量なり。水も亦十分なり。流水を汲む。其性甚た良し居宅を建る木材にハ乏き所あり。若し多人数渡来して。家屋を建築せハ。忽ち用ひ尽すへし。本島に生する樹木の類ハ。「ヤマナ」(未詳)と。野生桑の両種とす「ヤマナ」と称する木ハ。「ブラジル」。「メキシコ」の「リツト、ウード」(赤き木の義)の類にて能く永久に堪る木なり

「コイド港」及ひ其近海ハ。良種の魚類極めて多量なれ共。珊瑚礁多くして。海中に列を為し大網を引く事あたそれ。是故に釣。或ハ小網を以て之を捕る漁猟の良地ハ。海濱より珊瑚の列を為したる地部に近接したる深き海中にて。「テンハーソム、ホール」(十尋坑の義)と称する所に在り。魚の種類ハ甚た少し嘗て「ミユスコイハシナ」船にて。大網を投せしに僅に五種を得しのみ即ち鰡(ボラ)一種鱸二種「カル」(未詳)一種尋常の鱝(エイ)一種なり。沙魚甚た多し其小なる者ハ珊瑚石の間に遊泳し。犬来りて之を捕へ。砂上に揚る事あり。

又本島の海中に緑色の亀多し。渡来の船舶多く之を取て食料とす。又蝲蛄(ジャリガニ)多し。螺(ニナ)類極めて多けれども珍奇なるもあらす。「チヤマ、シガヌ」と称する貝ハ。食料に供ふへし。然れ共硬くして消化し難し。其他に食ふへき貝類を見す蟹の種類甚た多くして数ふるに違あらす。就中陸蟹多し。其大小形状。色澤。各々同一ならす。其最も多きハ世に海賊(ハーレート)。又宿借(ヤドカリ)と称する者とす此海賊ハ。其脊に或ハ白色。或ハ黒色。或ハ大或ハ小く或ハ丸く或ハ長く。大小形状。色沢。悉く相同し

かられ。貝殻の捨れたるを見て之を奪ひ以て其住所とし。
本来の住居なし。是故に海賊又宿借の名義あり。
海陸の鳥類。甚た少く実に住むへし陸上に住する鳥類。僅
に四五種に過す。其最も大なるハ鳥鳩の両種にして。其他
ハ皆小鵐(トリ)なり又海中の鳥類ハ鷗と他の一両種の海鳥の
み本島の近海に至れハ頗る巨大にして。其翼に光沢ある
海鳥を見ることハへ里。
四足獣ハ羊鹿豕山羊。且猫。犬多し猫と犬とハ其初其主あ
りけれ共。今ハ之を失なひ原野山林に住しけれハ。土人大
に賎んて。野獣と称し。其飼ふ所の犬を使役し。以て之を捕
ふ。往時。「スタップレトン」島。及ひ自餘の島嶼に来住せし人民
山羊と豕とを植しあ方今に至り。「スタップレトン」の山羊。異

常に多く播殖せり。彼理氏も「ペール」島北部の海岸に牝牛
二頭。牡牛二頭を残し又北島に上海産の四尾半五頭と山
羊六頭を止む。是れ後日播殖せしめんか為なり。
無人島中にて。居人の多きハ。「ペール」島なれ共。彼理氏の到
至し時にハ。僅に三十壹人に過す。就中亜国人種三四人。英
人三四人。葡萄牙人一人。其他ハ「サンドウヰス」人。及ひ本島に
て出産したる究華なり。土人各々一地を耕し蕃藷(サツマ)玉蜀黍(トウモロコシ)。
冬瓜(トウカ)茄(ナス)葱(ネギ)「タロ」詳未及ひ諸種の菜実を植ゐ。其最も多きハ。西瓜。
「バナナス」詳未鳳梨これ此地上の産物を豕。雞。鷗。抔と共に貯
へ置き入港したる鯨猟船に鬻く物品とす。「シュスコイハン
ナ」船。本港に四五日碇泊せし間に於テ亜国の鯨猟船二艘。
英国の鯨猟船一艘入港して小舟を浮へ土人の許に到り。

食料を求め出港せし者あり。土人焼酒製の飲料を好むを以て本ト船中に齎し来る焼酒を右の食料と交易せり。土人筋骨を厭むされハ。尚ほ廣く耕し得へし。方今土人の耕作する地ハ。諸所に散在し。多くハ海濱の低くして。海水に接する所にあり。又海岸の平地にも在り。其低き所を山上より新なる溪水流れ来りて。作物を培養せり。其開墾したる地面島中を総計して僅に百五十「アクレス」一アクレスハ我カ十八歩余ナリに過す。地質ハ甚た肥腴にして。本島と同緯度の「マテイラ」。「カナリア」両島に異なる事なし。本島ハ葡萄を作るに適地にして。又小麥。煙草。甘蔗。及ひ自餘の草類を作るに妙なり。土人既に其自用の甘蔗煙草を植る事実に多量なり。

ペイル島に居住する人民ハ洪福にして。不足なかるへし。欧洲より来住せし者ハ。其座右に心思を慰し開化を進むるの具を備へ以て其意に適す居人其室内を数局に分ち支那製の畳を敷き。其壁にハ壷幅を掛け椅子一両脚を并へ。食盤を出し又藍物に區分したる物品。及ひ各色の石版を備へ。以て自己の欝閉を破るのみに非す。奢侈に屬する物をも備へ。眼目を楽ましむるの一具とせり。
本島に来住する「サンドウイツ」人ハ。航海家。交易家の親しく目撃する如く。其本国に斉しく。棕櫚を集めて屋上を覆ひたるを以て。恰も「サンドウイツ」島の一村を携へ来る者に似たり。爰に居住する者ハ。氣候平穏にして身体の健康を進め。且土地豊饒なれハ。僅に筋骨を労し飲食に乏き事なき

を以て皆依然として。故國の情を起す者なし。是故ニ亜國人。歐洲人等。「カナカ」婦人の貞実善良なる者を撰ひ。細君とし居住せり

提督彼理氏。本島ニ碇泊する事暫時なりしニ虽。務めて「ペール」島内の事跡を密ニ探索せんと欲しけれハ一隊の人員ニ命し。之を分て二列と為し。其一列ハ士官「バイヤルドタイロル」氏を以て長官とし。其一列ハ副外科医官「ファース」氏を。長官とし。内地ニ入て探索せしむ

右両氏提督の命を奉し。密ニ探索せんとの目的なれハ忽ち旅装を整へ。六月十五日早朝船中を立出けり「タイロル」氏の麾下ニ屬する者を。同氏と共ニ八名とれ。即ち「バイヤルド、タイロル」氏。工長「ペーネ」氏。傳令官。「ボードマン」氏。器械補官「ラウレンミ」氏。賄食官「ハムブトン」氏。海兵「スミッツ」氏。水手「デニニス、テルリ」氏。支那人擔夫一名なり。「ペートル」島ハ蕞爾たる一小島ニ過して其長さ僅ニ六里なるニ「タイロル」。「ファース」両氏ニ分れて。検査する事なれハ。一日ニして忽ち調も人と思へり本島の北部ハ直ニ港口ニ接す。「ファース」氏検査の持場とれ其南部ハ「タイロル」氏検査の持場とれ即ち下ニ述る所の如し

十五日朝日出ニ「ヨスコイハニ」船を離れ小舟を浮へ港頭の汲水場ニ達し上陸して諸人ニ食料及ひ弾薬を分ち與ふ此時偶て土着の「カナカ」人来りし故嚮道たらん事を請ふれ共肯せんと是より「カナカ」人の居所まてハ小径ありて一岡を越へ三里と云へり是ニ於て「カナカ」人の教ゆる

所ニ倣ひ行ひしニ其路ハ滑（すべり）道ニして峻急且回阪線中ニ
生する草類繁茂し加之棕櫚多く其間ニ沙穀米樹も茂り
又寄生木ありて樹枝より樹枝ニ渡り恰も綱を張たるか
如し此時未た早朝なれハ密林叢樹の間より落る白露密
雨の降るニ異なるを以ハ諸人皆其水皮膚ニ徹したり。本
地の地質ハ。「ロイド」港及ひ自餘の地質ニ同質ニして壇形
の岩石の破裂せし者ニ草木の腐敗せし者ニ相混して生
せしなるへし此壇形の岩石ニ云るハ丘陵の脆（もろき）性粗造の
石大なる橙花の開きあるか如く破裂して周囲ニ黄色を
帯ひ落ち来る者なるへし」又諸所ニ高さ三十「ヒート」ニ及
ふ大樹あり白花爛熳ニして既ニ満開を過き地上ニ落て
白雨の残れるか如き所あり。

山上ニ登る道路ハ丘背ニして遂ニ山頂ニ達し其間草木
叢生し又棕櫚葉大傘を開くか如く大木相接し蔓草密綱
を張るニ齊し日光之ヵ為ニ遮られ白昼も尚ほ暗然ニし
て二三十「フート」の外を洞視する事能はされハ道を誤り
し事も少なからす既ニ登りたれハ丘背の側ニ数十の小流
あり其邊りニ到れハ数千の陸蟹足音ニ驚き其穴より出
て奔り去る者幾千萬といふ数を知らす」
山上ハ縦横ニ一里若くハ半里の平面ニして波紋の如き
凸凹を生し又深き溝あり山脊の一面ニハ深き凹路あり
て甚た峻急なり之を下るニハ一樹より一樹ニ傳はらさ
れハ下り難し其幾ゝなる峻山の間の凹路ニハ諸所ニ尭
岩あり其餘ハ悉く青草叢生し此間一條の河流を生して

岩石の上を通し草葉を穿て丘陵の下ニ流る実ニ原野の
好風景なり
「バイヤルド、タイロル」氏の一列「タロ」（未詳）と称する木の深林
ある原野を過ぎ之を越へて其後ロニ出たり然るニ此路
峻難ニして行へあらざるを以て再び「タロ」の樹林ニ取り
河流を渡りたる所ニ渓谷を隔て村落ニ赴く路と覚ゆる
一道あり路傍彼此の地所ニ蕃薯。「タロ」煙草甘蔗冬瓜。「ジダ」
一名印度産「グーシベルレー」（鵞鳥の覆盆子の義）を植たり。其播殖実ニ
ニ驚くへし此時四方を回顧すれハ。一渓の中央ニ當り二
本の棕櫚ニて葺たる小屋ありけるを以て其内ニ入り窺
ひ見しニ今朝までも何人か住たる跡ハあれと一人も其
人を見ず是ニ於て砲声ニて土人を誘ひ出さもやと思ひ
付たれハ史を点して一発せし忽ち大音ニ呼ひて出て来
る者あり之を見れハ南海島住の人種ニして其面ニ薄く
藍黥し其身ニ粗製木綿の襯衣と腰衣とを着したり此一
男子自ら以へるハ予ハ本ト「マルコイザス」島の内「ユカワ」の
産ニして貴き司法官なりと。「マルコイサス」ニてハ高貴な
位階と見へたり彼れ自ら一舎を構へ耕作すへき一地を
設けて犬数疋豕四足を飼ひ清潔の形勢なり予等ニ丁寧
を尽し且彼か部下ニ命して親切ニ百事を告しめ又自ら
彼か住む所の渓は山稜を回り海岸の西方ニ至て始て開
くと以へり司法司渓流を指して以へるハ此河小流の如
しと雖其水量獨木舟を浮ぶるニ足る我も今一舟ニ棹し
緑亀を捕へ取りし所なりと彼れ自ら一大亀を携へ来り

之を屠りて四足の犬を呼ひ分ち與へけれハ犬欣然たる
容貌にて忽ち喰ひ尽してけり
司法司又予ホに向て云へりけるハ我き能く諸君を本島
南部の極所に案内せん然るに往来すへき道路なく大約
其里程三四里もあるならんと此時又司法官一漢を呼ひ
寄たり其名を「ヲタヘータン」と呼ふ其顔色銅色に斉し僅
に英語を辨す「ヲタヘータ」自ら南部に至る道を知り又
能く野熊を獵すと以ふ然れ共司法官行き給はされハ諸
君と共に行く事を欲せすと答ふ司法官其初ハ逡巡して
承諾せさりしか過刻捕へ来りし亀肉を収め終りたらハ
諸君と共に南部に赴かんと同意しけるを以て予等も皆
然の事なりと申たり。

司法官か住む所の谷ハ其長さ洋里にて一里其幅ハ最も
廣き所にて一里を四分するの一と云此谷両三條に分る
予等か既に通行したるハ其小なる者にて其大なるハ東
に向ひ中央に小河なり此谷の南部ハ岩石累々として恰
も大堤を築きたるか如くなれハ実に往来すへからす司
法官か居宅ハ海濱より半里餘の所にあり本地の土質ハ
真土にて土人の耕作して得る所の富饒なるを以て察す
れハ地味極めて肥腴なると見へたり煙草ハ殊に地質に
應して其高さ五「ヒート」に及ふ者あり。淡水ハ甘味を帯て
清潔且終年一時も絶る事なしとなん司法官其帽子に檸
檬（ブツチカン）を盛り居し故何所にて取りしやと尋しに谷の北にて
取たりと答ふ

司法官漸く亀肉を收めたれハ「ヲタヘータニ」氏ヵ郷道ニて凹路ニ流るゝ溪水ニ沿ひ東南東ニ向ひ立出ける儲此水底ハ所謂壇石の碎片相累り溪邊ニハ田畝線中ニ生する草木及ひ寄生木多く茂生しけれハ樹林の稠密なるヿ土質の粘滑するヿニて実ニ脚歩を進め難くて二人後れし者あり之を待んとて名ニ誇り居りしニ一発の砲声聞へし故何やらんと思ひしニ二人来りて一疋の野熊を見出し之を狙撃せしニ惜むへし中ちを望しと答ふ」土人の飼ふ犬の樹林ニ入り野獸を驅逐するの功なく唯々其主人の左右ニのみ在るを以て山中ニ連れ行ても其用を為さゝるなり

溪流を離れて凹路の南部ニ出けれハ其道峻急ニして樹根ニ攀ち或ハ大なる蔓茎を撰ひと之ニ傳ひ登望しニ樹陰深く且樹枝路上ニ横もり人跡なき地なれハ各人皆別路ニ別れける唯郷導の両人のみ早く山頂ニ達して予等を待居たり暫時ニして各人皆登り来り相見れハ其手ニ疵を受し者あり是路上ニ棕櫚多く其間ニ「パルマラテナ」木詳ヿ唱ふる木ありて其幹ハ「ヒート」餘其葉頗廣く葉角ニ刺を生し之カ為ニ傷られしなり「パシタニュス」ヿ稱する木あり此木直幹ニして其下部より二三十の嫩芽を生して地中ニ入り其形金字塔ニ似寄り其上部ハ四柱の如く長く延て上端ニ青々たる葉を生し美景なり

同伴の内ニ於て後れし者あ望し故山脊ニ止り待居たるニ比隣の溪中ニて犬ニ犬の吠る声頻ニ聞へけれハ直ニ

両人立向ひけり其後も尚砲声聞へける故長官「ダイロル」氏も砲声の地を目的とし深き樹林を押分け行けるに野熊の巣窟ありて小流の所に到り見れハ同伴の壮士等小熊を捕へて囲み居れり其熊ハ生れてより未た一歳に満すして鼻長く毛色黒灰色黒灰色を帯ひ甚た不潔を極め其形状恰も支那の豕の如し此時同行の「ハムフトン」氏獨り山脊に残りたるを以て司法官彼を迎へんとて馳せ行たりしか忽ち皈り来て「ハムプトン」氏ハ病魔に罹りて来り得すといふ然るに同氏大に疲労したれ共暫時にして快復し予等か許に到れり「ハムプトン」氏快復したれ共疲労未た残れる故同伴皆此より皈られよと勧む「ヲタヘータン」に里程を問へハ島南の極所まて僅かに二里と答ふ

「ハムプトン」氏之を聞て二里ならハ我も能く行んと云ふさらハとて彼の小熊の肝臓ミ脾臓ミを取り其死体を八樹枝に掛て各々南部に立出ける
夫より大約半時を経て山脊を越へ南部斜地の絶頂に達す本地よりハ既に海水も見へ又正南より少し西に当て遥にバイレー島の景色も聳へて見ゆ是より尚ほ進み行かんとするに「ヲタヘータン」氏道を誤るを以て行路半腹岩石峻急にして下るへからハ又前路に皈らんとするも嶮岨にして野草満地に叢生し葡萄せされハ皈るへからす是故に同行皆二百「ヤルド」の間辛ふして登り漸く嶮岨を過たるに又急なる下り阪なり諸氏皆阪を脊にし滑り下り益々急所に至れハ蔓草を力にし或ハ地の高き所

に手を拭て急に落さる様用心して下り漸く凹路に達したれとも未た海濱に流るゝ溪流なく十「ヒート」より五十「ヒート」の断岸ありて之に登り此難路を経されハ。海邊に下り得さるを以て同行皆大に歎嗟せ里丈より或い先たち或い後れて漸く小流の側に下り其先つ下る者今尚ほ岩稜を傳ひ嶮路を下り来るを見れハ我も既に彼の難路を能こそ無難に下れ里と思もれて実ふ身体戦慄を催したり

「ヲタヘータン」氏一江を指して云へるい之を南東江と稱す鯨獵船の屢〻来る所にして其来りたるを證せんとて大斧を以て一樹を切り其断痕を平にし今尚は存在すと本地の河岸に於て雜草と共に蕃茄(アカナス)の生せし者有り是れ自然生に非す曾て人手にて植し者なるへし偖諸氏難路に悩み大に疲労し且炎暑焼るか如くなれ共皆一所に會し火を焚て今朝捕へたる小熊の肝臓と脛臓とを出し又携へ行たる豕肉及ひ其他の食料を合せ煮て之を食ひ各〻臨時の盛饌なれハ貪りて満腹に至り疲労を慰し。休息しぬれい既に二時に至て皈路に赴かんとし此時「ヲタヘータン」前路を経て皈らんことを云し故諸氏皆亦前路の艱難を想像し其危篤を恐怖して顔色悽然たり然るに他に皈るへき路なけれハ止む事を得す前路より皈りされと疲労を累ねしのみふて「ヲタヘータン」并両氏に請もれ司法官か居宅の山溪に皈着しけり

司法官ヶ許に皈りて時計を見れい既に六時なるを以て

同氏ヵ宅ニてハ実ニ暫時休息せしのみニて立出けるニ
同行の一人大ニ疲労して歩行し得さるを以て。「タヘー
タン」氏ニ頼み獨木舟ニて「ロイド」港の南端「カナカ」人の住
所ニ送り其他ハ皆今朝来りたる陸路より皈らんと立出
たりしの道見へすして欝林ニ入り又雑草多く加之路上
ニ凸凹ありて途中ニて又同伴の一人大ニ疲れ歩行し難
きヵ故ニ山上の平地を撰ひ一人を添て残し置き「ロイド」
港の南端「カナカ」ニ達し本港ニある岩上ニ坐し本船「ジュス
イハンニ」を見れハ暗夜朦朧の中ニあり是ニ於て皈着を
表せんヵ為ニ小銃を連発しぬれハ本船より小舟を浮へ
来りし故彼疲労の者を迎へ同伴悉く之ニ打乗り「ジュスコ
イハンニ」ニ皈りし時ハ既ニ十時なり衆皆実ニ疲労を極

免たり副外科医官「アース」氏も同時ニ皈着したり今日同
氏の経過したる途中の事跡ハ左ニ述る所の如し
「アース」氏等本島の地質を検査せしニ諸所ニ於て嘗て火
脈の噴出したる痕跡あれハ其初噴火山たりし事疑ふへ
からす所謂擅状の石類ハ鍾乳石と緑石と相混したる物
ニして本島の基礎より其丘陵ニ至るまて悉く此石類よ
り為る本地の凹路ニ一の硫黄泉あり之を嗅ニ其氣猛烈
之を味へハ硫酸尾斯なり又諸所ニ硫鉄多し島中ニ生す
る所の草木本島と同緯度の噴火地ニ在る種類を見す「ロ
イド」港ハ強き噴火山の噴口なるへし其火を噴出するニ
當て方今の港口ハ周囲ニ丘陵を生し其側ニ深き溝渠を
生するヵ如くニて其坑中より熔解して流れ出る所の物

品悉く溝渠より海中に落ち鎮火の後一溝を生して海水と灰燼と残留し水燼も漸く枯渇して唯々珊瑚の残餘を止め港底に沈在せし者ならん
本島ノ地形同一ならハ平地ハ丘陵の下より海岸に達し其土質ハ黒色にして植物を培養すへき糞土と其深底ハ珊瑚にして表面ハ此糞土に貝殻石類を混し五「ヒート」乃至六「ヒート」散在せし者なり此平地甚と肥腴にして既に開墾せし所に殆と巨大なる番薯玉蜀黍「ヤムス」「タロ」芋ホ詳西瓜野菜類殊に頗る巨大にして良種の甘蔗を生す曾て「アイリス」國の薯種を齎し来り之を植へて試みしに其年月未た久しからされハ地質に應するや否やを知らす江口の平地ハ開墾せし所未た甚た些少なれ共他所の肥腴なるを以て察するに江口も亦肥地にして之を開かハ多人数糊口をなすへき物品を生せさるの理なかるへし
本島の丘陵ハ平地より漸次に登る者あり又峨然として急に登る者あり其峨然として登る者ハ一の臺上に又一臺を重ねたるか如し江頭に屹立して相對したる両峯あり之を乳頭山と稱す其一山ハ一千「ヒート」其一山ハ一千百「ヒート」といふ此両峯遥に海上より港口に當て見へ恰も航海客に港口を示すか如くなれハ実に航海の要峯なり「アース」氏の検査したる北部半島にハ湧水少くして唯々二泉のみなれ共清浄なる飲水常に絶る時なし此二泉の外渓中諸所に湧泉あれ共塩氣を帯ひ且乾枯するを以て頼むへからす雨後にハ渓間の凹路に数條の小河を生

し海中ニ落れ共河底岩石なれハ晴候ニ至れハ僅かニ水気あるのみなり

草木の種類ハ回帰線中ニ生する草木ニして木島と同緯度の地位ニ生する者の如く青々として暢茂せ里渓中及ひ海渚ニ一種の大木多し土人之を「クリェメ」と唱ふ此木の幹ハ大ふして短く灰色の皮あり其葉ハ密ニして枝の周囲ニ叢生し其葉ハ状ち楕円ニして緑色を帯ひ表面平滑なり其花ハ枝端ニ開きて白色なり

棕櫚ハ丘陵より左右の渓中ニ至るまて欝々として繁茂しけれハ其本体を見定め難き程ニて他樹之かためニ壓せらと成長し難き者あり島中ニ生する棕櫚六種あり就中「バンニパルム」と称する棕櫚最も多し又木種の内ニ於て頗る巨大なる山毛欅（子ノキ）の一種あり又「ドックウード」（大木の義ニ）類似し多る一種の大木多く山上ニ見ゆ桑樹ハ殊ニ多分ニして其周囲十三「ヒート」より十四「ヒート」ニ及ふ者少からん短小なる草木の類ハ桂樹杜松柘植蕨「バナナ」橙鳳梨越橘これ「リチュス」「モセス」（共ニ苔の義未詳）及ひ寄生木の種類甚た多し

野草の種類極めて少し偶々多く生する者あれ共牧畜の食料ニ供へ難し又未た開墾せさる地ニ生したる一種の野草あり此草漫りニ繁茂して他草を生せしめれ

島中ニ数種の獣類を放ちあれ共雜草の内ニ臥し大樹の間ニ往来せしを以て悉く野生の獣類ニ化し多り島類ハ鳩。鷲。烏。「サンドバイプルス」（未詳）来往し又亀。大蜥蜴小蜥蜴多し是れ島中従来の者なるへし

右ニ述る如く「ペール」島ハ既ニ両氏ニ命して検査せしめたるを以て提督彼理氏又士官某氏を招き「スタップレトン」島の地質地形及ひ其要件を検査せし処人之ル「スタップレトン」島も亦其初噴火山ニして平地丘陵渓谷あれとも開墾すへき地位少きニあられ本島の西部ニ一小江あり海水意外ニ浅し其周囲ニ八十「ヒート」より一千五百「ヒート」の高山岩石直立し以て本港の南東より来る大風を防く屏障ニ為る者の如し

本江ハ小岬ニ珊瑚石ニして其周囲を繞らし北部ニ接する所の岩間より清凉ニして美味なる一泉を生レ其水量一分(ミニュート)時間ニ三「ガルロン」（一「カルロン」ハ大約我二升五合）を出れと云「スタップレトン」島の産物も「ペール」諸島ニ異なる所なし唯ハ山羊大ニ播殖して数十疋ニ及ひたれとも峻山を越へ絶壁を渡り其生路を営み来るを以て性質悉く野獣ニ変したり」彼理氏従来亜国交易の為ニ自から無人諸島の地形及ひ其要件を検査せんとするの企望ありしか今「ペール」島を撰んて後日「カリホルニヤ」ニ支那との間ニ往来する蒸気船の碇泊所とせんとす是故ニ彼理氏地形を検査し港内を探索し又後日の食料ニ為ん為「ペール」「スタップレトン」二島ニ数疋の獣類を放ちたり彼理氏又土人ニ野菜穀類の種子を與へ且後日用ふへき農具及ひ獣類を放ちし所以をも土人ニ申聞せたり此外同氏政廳埠頭(ハトバ)石炭庫蒸氣船會所を設くへき地所をも撰ひ之を本國の私有とれ其地位ハ江頭の北部ニして其長さ「千ヤルド」の海水

ニ面し就中五百「ヤルド」ハ海濱ニ接して深き所を撰ひ海
中五十「ヒード」の所ニ避波を設け以て大船の碇泊するニ
備ふ
提督彼理氏右の如く検査せしを以て亜国蒸気船碇泊所
ハ「ベール」島適應の地なる人事を一書ニ記し之を本国の
海軍局ニ達す其文ニ曰く
卄者常ニ太平海中を往復する船舶の碇泊所ニ集會所ニ
を検出し定め人ニ希望いたし居候間此行の初より琉球
港ニ無人島中の良港ニを撰ひ碇泊所ニして恰も連環の
相連り驛程の相続くる如くし以て飛脚蒸気船往来する
線路の休泊ニ備へ度候今太平海中亜国ニ属する海港ニ
支那の海港ニニ蒸気船の往来出来せハ此盛代の歴史ニ

も稱誉する所ニて亜國并ニ世界萬國交易の為ニ至要至
切の良港ニ可有之存候
合衆国ミ欧羅巴ニの飛脚船ハ「エゲーブ」ト紅海印度海を
経て一月中二週毎ニ日数を違へス必す香港ニ達し申候
香港より上海まてハ五日の海路ニ有之候上海より「カリ
ホルニア」まて合衆国ニて船を出し候ハヽ上海より欧洲
迄の海路ハ英国ニて船を造り必ス出し可申候
蒸気船ニて上海を出帆し無人島「サンドウヰス」諸島を経て
「サンフランシスコ」ニ達するニ薪水等の為碇泊するを三
月ミ定め三十日ニて来着可致候是故ニ「サンフランシス
コ」より「サンドウヰス」島中「ホノルヽ」まての里数大約二千九
十三里「ホノルヽ」より「ベール」島まて三千三百の一里「ベー

ル島より上海河口「ヤンツーケン」まて千零八十一里総計
六千四百七十五里有之候一日ニ二百四十里程ニして海
上二十七日碇泊三日ニ定む又「サンフランシスコ」より「ニユ
ーヨルク」まて二十二日程なれハ上海より「ニユーヨルク」迄
総日数五十二日ニして着し可申候
英国よ里経路「マルセールス」を経て香港ニ到るニハ其日
数四十五日乃至四十八日ニ相成候此日数ニ香港碇泊二
日上海碇泊五日を加へ候へハ五十二日より五十五日ニ
て上海ニ到着可致候
上海を英国蒸気船の往来する極所ニ定め又亜国蒸気船
の往来ある始ニ定め申候右故英国船の持皈る書簡ハ之
を西ニ送て「リウエルポール」ニ達し亜国船の持皈る書簡ハ

之を東ニ送て「カリホルニヤ」ニ達し其日数大約同日ニ可
有之候
右の船路を備へ交易の便利を得候ハヽ貨財を得の利を
論せハ拙者せふ至要なる策畧せりと名誉を可得候又既
ニ数十年来支那人「カリホルニア」ニ渡来致し候者其船中
薪水を除くの外自費ニて諸品を備へ一人前五十弗宛ニ
有之候
支那人ハ質朴ニして能く使役ニ堪る性あるを以て「カリ
ホルニア」ニて農業ニ従事せし兆度候
上海ハ方今支那の大交易場ニ相成殊ニ合衆国ニ交易を
開きし以来ハ関東ニも越申候係し同国の産物上茶絹絲を
其外高価なる奇物を蒸気船ニ出し五週ニて「カリホルニ

ア」ニ送り八週ニて「ニューヨルク」ニ送り候様迅速ニ致し
候ても其利益ありや否や先見致し難く候
亜国ニて東海ニ交易を開かんと欲せハ無人島ハ実
ニ至要なる地之以其證ニハ彼理氏既国ニ至ても尚
ほ心中ニ止め此書の草稿を終りて後右の追記を編
輯家ニ授け加入せしめしなり

無人島追記

予嘗て以為らく無人島ハ太平海中を往返する船舶
の碇泊所ニ無二の適地なりと又以為らく太平海中
無人島近海ニ赴く鯨漁船の薪水及ひ食料を求むる
の妙地加之「カリホルニア」より日本を経て支那ニ航
海する船舶の石炭を貯蔵するニ無二の地位なりと

是故ニ予此行ニ於て無人島ニ到らさる事を得さを至
しなり

無人島ニ亜細亜海との間ニ於て鯨魚多く殊ニ日本
近海ニ多し帝国日本ハ独立の国ニして他国ニ交通
せさる国風なれハ其手ニ陥り或ハ幽囚或ハ惨刻の
所置を受ん事を恐れ鯨猟船も敢て其海濱ニ近つく
者なし然るニ今日ニ至てハ既ニ日本ニ条約を結ひ
盟文あり又不幸ニして日本海岸ニ漂着する亜船又
猛風の為ニ破損し其修復を加へんとて入港する亜
船ハ親意を以て待遇せんといへる保證あれハ衆皆
更ニ恐怖する事なかれ箱館下田両港も船舶修復薪
水給与の為ニ既ニ開港あり

前條ニ示すか如くなるを以て亜國の鯨獵船後来ハ日本海殊ニ東海ニ於て何の障碍なく安全ニ其海濱ニ入港すへし然れ共我か鯨獵船を日本の港内ニ其國法の制禁なく又其國民の妨障なく安全自由ニ出入せしめ難き所あり是れ一の欠典にて既ニ條約各ニ日本ニ於て箱館港下田港琉球ニ於て那覇港を開くと雖皆従来鎖國なるを以て土人外國人を見て或ハ悪ミ或ハ嫉むの風習急ニ脱し難く又鯨獵船の水夫も粗暴過激なるか故ニ實ニ急速相親和して交通し難かるへし是れ予か無人島を開くの議論を主張する所以なり予か見を以てそれハ本島の何ちの管轄ニ属するやを論せん左ニ示す如く無人島中の大島「ペール」港ニ植民するを良策とし予既ニ此紀行ニ於て詳ニ本島の事跡を述へ今又加ふるニ人民を植へ家屋を建る事を以てす若し予か此策を施さハ後来其殖民全島ニ播殖すへし若し予か策ニ決定する時ハ先つ数名の工匠と相謀り又同社を結ひ貯金を設け「ペール島ニ植民すへしされと其入費も恐くハ多量ニハ至らさらん先つ三四百頓の船二艘を作り鯨獵の用意を為し倉庫住舎を作るへき木材を積ミ送り又雑貨舗海軍需用品其他鯨獵船商船ニ要用なる諸品を備ふるニ欲くへからさる要具を送り此船「ペール」島ニ到着せハ殖民と荷物とを揚け日本海及ひ其近海ニて鯨魚を獵し時々本島ニ到るへし此

二艘にて得る所の鯨油既に一艘に積むへき量に満
たちハ一艘ハ其鯨油を本国に輸送し後新に植民を
載せ且島中にて切要なる物品を積み来り二艘にて
新陳交代すへし右の如くせハ殖民も久しからすし
て播殖し且此事件に関係しある同社も裨益を得る
に至らん此時に至らハ亜国英国佛国の鯨猟船「ヘー
ル」島に輻輳して来往の商家にてハ船中必用の諸品
を求め農家にてハ野菜を求め工匠の家にてハ修復
を頼まん若し其代料なき時ハ右の船中に貯ふる鯨
油を取るへし
○其初本島に到りし殖民新に別宅を構へて産業を
営むに至るまてハ跡より到る者ハ新嫁の者にて先

居の者と同居すへき者の外ハ漫りに到る事を許さ
れ斯く同居せしむる時ハ同教相親み洪福相共にし
て異論なく又故障なく我か教法を傳ふる基本を起
すへし是に於て傳教師を招き日本臺湾其他近隣未
開の諸国に遣すへし○方今「サンドウヰス」諸島より
日本海にて鯨猟する船舶近隣に到るへき海港なき
を以て止む事を得す其漁猟する地より数千里を隔
て或ハ「サンドウヰス」島に到り或ハ香港に到て其要
品を求め又無益の金貨を失ふ金主ハ之か為に大に
散財し水夫ハ疾病を生し且放蕩懶惰に陥り頽る風
儀を破るに至る今「ヘール」島を開き碇泊所と為さハ
鯨猟地所の中央なるを以て往来の雑費を省き且水

丈等も数年間ハ耽溺の地ニ遠かり放蕩の術を失ふ
へし○無人島を其始て検出せしハ日本人なるを以
て之を管轄する権威ハ実ニ日本ニ属す日本より希
望するの外ハ本島を管轄するの権威なく先つ殖民
する者によるなり

無人島ニ四日碇泊して「ジュスコイハニサ」「サラトガ」の両
船六月十八日早朝出帆して再ひ琉球ニ赴かんこ其艤装
をそ調へける

小笠原島紀事全部三十二巻稿成第一ノ巻頗ル数紙繙閲
ニ不便ナランヿヲ恐レ割テ乾坤二巻トナシ且第十九ノ
巻ヨリ全ニ十一ノ巻ニ至ルノ三巻ハ則真景圖ニシテ共
ニ総計三十三巻ト為スナリ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan